

邸宅調査の報告

1.旧滄浪閣（伊藤博文邸跡・旧李王家別邸） 新規確認事項（更新情報含む）

【痕跡】

- 北側屋根材（JIS製亜鉛鉄板）の下に赤色の石綿スレート板が一枚残る。野地板、防水紙ともに、納まり状況から当初の屋根材と推定。創建当初は赤色のスレート板が使用されていた可能性がある。

※日本では明治39（1906）年から輸入品の石綿スレートの屋根材が市販されるようになった。大正3（1914）年にオーストリアから製造設備が輸入されてからは、国産化され、石綿スレート小平板の製造が始まる。初期の構法では、椽に直接釘留めされていたが、後に野地板の上にアスファルトフェルトが施工され、屋根は5寸勾配以上、重ね代は2.5cm以上とされた。スレートなどのセメント系屋根は、関東大震災で粘土瓦に比べて被害が少なく、復興期に需要が増加した。引用：真鍋恒博、横江貴志、「我が国における屋根葺き材・構法の変遷」日本建築学会計画系論文集68（573）、2003

- 後補の壁の内側に石膏ボード下地と、木摺下地の内装壁下地が残る。部屋ごとに使い分けがされていると推定。（南側の洋室和室は石膏ボード下地、その他の範囲は木摺り下地が多い）石膏ボードの普及当初の壁工法が確認できる。また、袋貼りとクロス貼り（紙）がされた状態の石膏ボード下地があったことから、一部の壁の仕上げは、紙が用いられていたと推定。

※日本で石膏ボードの製造が始められたのは大正10年（1921）。大正12年（1923）に旧帝国ホテルの内装と天井に石膏ボードが採用されている（一般社団法人石膏ボード工業会）李王家別邸建築の大正15年当時は最新の建材だった。

- 外装壁仕上は着色モルタル(卵色)で、当時一般的だった防水紙が用いられていない。

※着色モルタルは大正当時多く利用された材料であり、古写真の色解析でも同様の卵色（黄色系）を確認した。

- 小屋裏に木製シャッターが残る。上げ下げの器具は窓外部に取りつく納まりになっている。

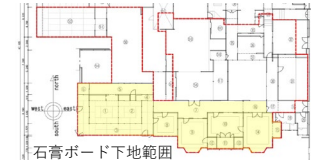
※木製シャッターは、天保8年（1837）にイギリスで作られたのが始まり、1903年（明治36年）には国産スチールシャッターが誕生している。

既に国産のスチールシャッターが普及していた大正15年に、木製シャッター（製造元不明）を取付けている。



北側屋根に残るスレート材

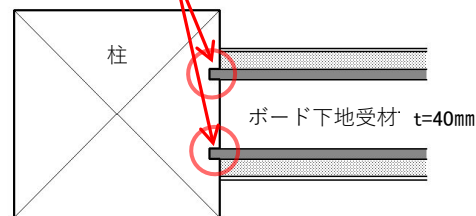
※その他は、石膏ボードと木摺下地が存在するが、部分解体による確認のため使い分け不明



クロスが貼られた石膏ボード

石膏ボードは柱にボード

じゃくりを施して納める



真壁納まり平面

石膏ボードを用いた壁工法



黄色系のモルタルに後補白ペンキが施される外壁



小屋裏に残る木製シャッター

2. 西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸 新規確認事項（更新情報含む）

建物調査

【痕跡】

- ・ タイルや、室内の暖房設備（ラジエーター）、照明器具は、ほぼ当初のものと推定する。また、衛生器具は戦後の製品があることを確認した。

タイル：山田タイル（資）（愛知県守山町）の硬質陶器タイルと、淡陶（株）（兵庫県北阿万村）

衛生器具：多くは東洋陶器株式会社（現TOTO）、車庫の手洗器には高島製陶所

ラジエーター：前田鉄工所（大正12年の関東大震災後に暖房用ボイラーや暖房用ラジエーターの製造開始）

照明器具：一部器具やグローブが取替えられているが、多くの照明器具は建設当初の製品（製造元不明）

- ・ シャンデリアは計3か所あり、打診したところ、全て真鍮製だった。池田自身が英国で購入したとされるシャンデリアは、金属製に見えるが木製だったと記載があることから、現存のものではない可能性もある。
- ・ 暖炉の飾金物（ファイヤーバック）、五徳、ファイヤースクリーンは、欧風建築に必要なマントルピースの逸品として、複製されたという記載※がある。※昭和8年の『建築土木資料集覧』
- ・ 暖房用ボイラーと給湯用ボイラーは後補。このうち、給湯用と思われる古い形式のボイラーは、昭和鉄工製の「アサヒボイラー」昭和30（1955）年の製造である。
- ・ ポンプ室内は、ポンプは更新されているが、井戸から圧力タンクまで当時の給水システムが残されている。

※アサヒボイラーは、国の有形登録文化財「豊郷小学校旧校舎群」に現存しており、2019年建築設備技術遺産に認定されている。（昭和11年製造）

※大磯では別荘が建ち始めた明治期から水不足が課題であり、町史には町民が海沿いの別荘に水をもらいに行った記載もある。岩崎家別邸（明治25年）の大規模な煉瓦造りの地下貯水槽が発掘されている。（発掘調査報告書『旧岩崎家別邸貯水施設』2010年より）



KY 山田タイル

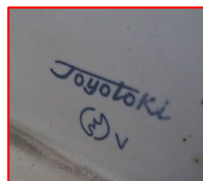


DK 淡陶タイル

タイル

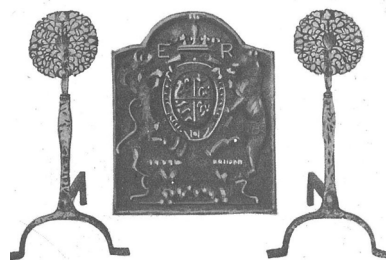


1928～1961年



1962～1969年

商標のデザインから製造時期を判断



建築土木資料集覧（建築土木資料集覧刊行会 編、昭和8年）より抜粋

マントルピース用品（堀商店）



給湯用ボイラー（昭和30年製造）



ポンプの刻印

2. 西園寺公望別邸跡・旧池田成彬邸 新規確認事項（更新情報含む）

聞き取り調査（ヒアリングで伺ったご意見を掲載）

【池田家親族】

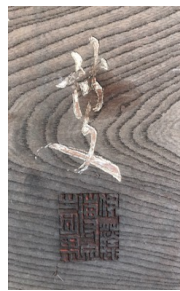
- 池田の温室には多くの植栽であふれていた。池田農園（大磯町西小磯）で栽培していた洋ランなども持ち込んでいた可能性が高い。
- 成彬は園芸に興味がなく、温室の植栽は池田成功氏（長男：池田農園を経営）が面倒を見ていた。池田家の資料の多くは農園のランと共に成彬の出身地（元米澤藩士）である山形県立図書館に寄贈されている。
- 伊藤博文が西園寺公望に贈った「隣荘」板額と、大臣就任の際の池田成彬と大磯町民の写真が見つかった。

【池田成彬研究者】 立教大学法学部教授 松浦正孝氏

- 池田成彬（しげあき）ではなく、本人の名刺に記載された「せいひん」が正と思われる。
- 池田の父である成章は建築にも造詣が深かった。米沢出身者5人でつくった「重遠会」の中に、中條精一郎や伊藤忠太といった建築家がいたこと、伝記にある三井本館建設時の指示の様子などから、成彬自身も建築への関心が強かったと考えられる。
- 同郷で中学で同じ寄宿舎だった中條精一郎とは大磯を度々訪れていたようで、父同士の仲が良かったようである。
- 池田と吉田茂の関係は深く、吉田は大磯の家に帰るときは必ずといって良いほど池田の家に寄っていた。
- 町民との交流もあり、地元の大工と将棋をしていた等の交遊録も残されている。



西園寺公望邸・「隣荘」板額(全体)

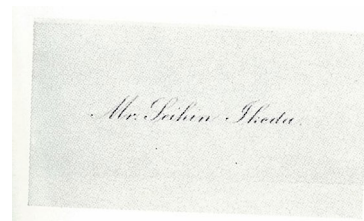


上「博文」下「伊藤博文之章」
(部分：花押、落款)



大臣就任のお祝いに町の有志が池田邸を訪れた際のもものと推定(昭和13年頃)

(大磯町郷土資料館所蔵)



「Mr. Seihin Ikeda」名刺
今村武雄著、「池田成彬伝」慶応通信発行

3. 旧大隈重信別邸・旧古河別邸 新規確認事項（更新情報含む）

【痕跡】

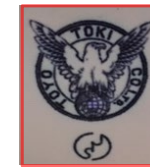
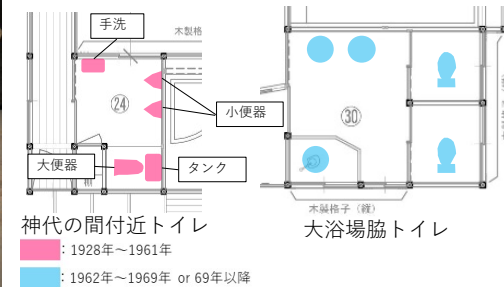
- 富士の間の小屋梁(1層目)天端において、ホゾ穴(当初痕跡)内部に屋根葺材と考えられる茅材の破片が残っていた。

※旧梁は1層目のみで、茅葺の特徴的な小屋組材（扱首：さす）の痕跡がなかったが、葺材と考えられる茅があったことから茅葺屋根であったことが裏付けられた。

- 手洗いや便器等の衛生器具は、神代の間に近いトイレに昭和3～36年（1928～1961）の高級品の器具が残る。浴場脇など、後補建築部分の器具は、昭和37～44年（1962～1969）とそれ以降の製品がある。



小屋梁天端ホゾ穴内部に残る茅材破片

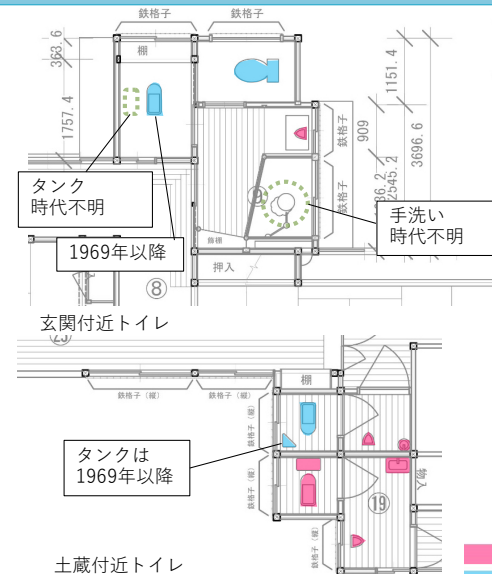


4. 陸奥宗光別邸跡・旧古河別邸 新規確認事項（更新情報含む）

【痕跡】

- 手洗いや便器等の衛生器具は、土蔵付近のトイレと手洗いなどに当初の器具が残っているが、戦後取替えられた器具（昭和37～44年とそれ以降）もあることがわかった。

- 屋根は、瓦材（JIS製品）や下地材の合板は、後補の物であり、近年吹き替えられたものと推定。下地材の下に当初の痕跡が残る可能性がある。



後補の屋根瓦

小屋裏から見つかったへぎ板材（2019年撮影）